

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：21401

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20H01576

研究課題名（和文）社会とアートの共進化的動態とartificationの諸相に関する領域横断的研究

研究課題名（英文）Cross-Disciplinary Research on Coevolutionary Dynamics Between Society and Art, Aspects of Artification

研究代表者

小松田 儀貞 (Komatsuda, Yoshisada)

秋田県立大学・総合科学教育研究センター・准教授

研究者番号：00234881

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 5,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究において、われわれは、文化芸術をめぐる今日の状況を「社会と文化芸術の共進化」の過程として捉え、その動態的諸相をartification（アート化）の視点から、記述、分析、考察することを試みた。課題として、「アート化」論の理論的検討、社会とアートの相互作用の諸相についての考察、文化芸術をめぐる市民協働・交流活動の記述と分析に取り組み、それらを踏まえて本研究の現代的意義を示すべく総括と展望を行った。

本研究は、ますます活性化する文化芸術の状況を見据えながら、様々な表現やアートプロジェクト等のアートの多様な社会実装の事例を探り、その社会的効果や意義について明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、文化芸術という複雑な問題対象に多様な専門性から領域横断的に迫ったこと（研究視点の多様性と領域横断性）、表現活動・企画を介して文化芸術の現場との接点を持ち実践的な視点が共有できたこと（実践性・現場感覚の視点）、文化的資源は東京等の大都市圏に偏りがちだが本研究では地方・地域の視点に厚みがあること（地方性・地域性の視点）にある。

以上を踏まえ、各地で活発化するアートプロジェクトや地域におけるアートの役割の増大等の事例に見られる社会と文化芸術の間のより緊密化する関係性をめぐり、その負の側面も含め文化芸術の今日的課題と可能性を示すことができた点に社会的意義が認められる。

研究成果の概要（英文）：In the research, we attempt to consider current conditions of culture and art as a process of “a coevolution between society, culture and art”, describe, analyze and investigate its dynamic aspects from a perspective of 《artification》. Our main tasks are following:
1) to examine 《artification》 as a theory; 2) to investigate interactions between society and art;
3) to describe and analyze participation, collaboration and communication in cultural activities;
4) to make a review of the study and give a lookout.

Seeing that culture and art are increasingly becoming activated, we could show clearly their social effects and significance, researching cases of various forms of expression and diverse types of social implementation of art as art project activities etc.

研究分野：社会学

キーワード：芸術化（アート化）、共進化、脱芸術化（脱アート化）、アートプロジェクト、文化芸術シティズンシップ、「文化の民主化」と「文化デモクラシー」

1. 研究開始当初の背景

産業化と科学・技術の進展は、複合的多元的な諸変動を引き起こしてきた。近代的市民層とその文化／教養に強く結びついていた「(高級)芸術(fine art)」は、多様なものを包摂する「アート」としてマス化した現代社会の中に溶け込み、作り手／受け手、公的／私的領域を問わずこれを享受する人々、これに関与する利害関係者も拡大を続けている。消費化／情報化社会の深化、文化市場の拡大を背景に、近代性の所産である美術、音楽などの「芸術」は、西欧中心主義的性格を希薄化させ、融通無碍に既存のジャンルやカテゴリを解体・融解させてきた。かつて「第七芸術」とも言われた映画、そして写真、演劇、舞踊はもちろん、今ではファッション、マンガ、ラップなども「アート」として認知、受容されている。種々のパフォーマンスアーツさらに「ビデオアート」「アウトサイダーアート」また「落書き」に至るまで時に政治化し時に物議を醸しながら「アート」の対象は広がり続けている。

これまでの芸術・文化社会学は、既存の文化秩序を記述・分析することに関心を払ってきたが、こうした芸術の新しい形式やジャンルの出現といった動態を必ずしも捉え得なかった。

近年、こうした芸術の内包的／外延的拡大、つまり「社会とアートの相互浸透」あるいは「アートの社会化／社会のアート化」の進行とでも言うべき状況について、artification(芸術化・アート化)という視点でこれを捉えようとする議論が生まれ広がりつつある。(下記参照)

*Shapiro,R.(2004).”Qu'est-ce que l'artification?” Congrès de l'AISLF <L'individu social>

*Heinich,N. et Shapiro,R.(2012). *De l'artification.Enquêtes sur le passage à l'art*, éditions EHESS

Shapiroらはartificationについて「人、対象、活動の定義と状態の変化を生み出す複合的な作用から生じる、非芸術から芸術への転換の過程」(Heinich et Shapiro,p.20)としている。ここには「de(s)artification(脱芸術化)」というこれと逆の過程についての視点もあることに注意したい。

この概念は「非芸術の芸術への移行」「非芸術と芸術の境界線」に注目する。あらゆるものが芸術になり得る。M.デュシャンの創作行為はこの問題意識の祖型とも言えるが、同概念の背景には、1960年代の現代芸術の爆発的発展と多様化(「コンセプチュアルアート」の登場等)を承け、「芸術とは何か」ではなく「(ある対象は)いつ芸術になるのか」という問いの優位を示したN. Goodmanの芸術論がある。これはそのまま本研究の根源的な問いである。

*Goodman,N.,”When is art?” in Perkins,D. & Leonar,B. (eds.),*The Arts and Cognition*,Johns Hopkins Univ.Press,1977

研究代表者は、Bourdieuの学説研究(文化資本、場(界)の検討)等を通じて、文化芸術と社会の関係の動態的变化に注目し、その延長線上に社会とアートの共進化的関係について考察してきた。本研究は、その議論をartificationの視点および社会的論理を核として再構築、展開しようとするものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、社会とアートの関係の変化を「共進化」の過程として捉え「いかなる条件の下でモノ／行為は芸術作品になり、作り手はアーティストになるのか」という「転換の過程」に注目して現代社会の文化現象をartification(あるいはde(s)artification)の視点で読み解くことにある。特に文化芸術のもたらす(広義の)利益とそこに関わる利害関係者(ステイクホルダー)に注目し、「転換の過程」すなわち「芸術の生成」の社会的論理を明らかにすることで、芸術にとっての社会、社会にとっての芸術の意味を探り、両者の望ましい関係のあり方とその未来の姿を展望するものである。

3. 研究の方法

上記に述べたように、内包的・外延的な拡大を見せる文化芸術の現代的様相を捉えるために、社会学(小松田、笹島)の他、美学・美術史・音楽学(野村、木村)、文学・映像研究(阿部)

文化政策(戸館 最終年度は研究協力者)など専門領域の異なる研究者・専門の参加を得て、領域横断的に以下の4つの課題を柱として研究を進めた。artification論の理論的検討(1~2年目)、文化芸術の社会化および公共性をめぐる問題としての「社会化するアート/アート化する社会」の諸課題の検討(1~3年目)、文化芸術に関連する市民協働・交流活動の記述と分析(1~3年目)、artification論の実践的総括(3~4年目)については小松田(社会学)が中心となり、文献調査を通して主としてHeinich, Shapiroらの議論を検討し、阿部、野村、木村、笹島、戸館が、国内外における文化運動、アートプロジェクト、映画祭等の事例研究の形で実施した。は、メンバー全員で共同研究の総括として ~ を踏まえ、文化芸術の現代社会における実践的な課題を示すこととした。

4. 研究成果

研究期間を通じて「研究方法」で示した4つの課題に中心的に取り組んだ。

【2020年度】 初年度は、研究会等を通じてartification = 芸術化(アート化)(以下「アート化」)概念の基本構造について理解を深め、認識の共有を図りながら、この議論の有効性と難点について検討した。産業化・情報化社会における文化芸術の内包的外延的拡大という現代的状況について、アート化という視点から迫るのが本研究の中核的課題だが、主要な論者であるShapiro, Heinichらの議論の概略の把握とこれに関する小松田の論説の検討を中心にメンバー全員で研究を進めた。また、本研究の主題と分担者の個々の関心とを関連させて、現代の文化芸術状況の中にアート化の視点からアクチュアルな問題性が浮き彫りになる事例を探索した。市民協働・交流活動に関わる地域アートプロジェクトが活発化する状況をめぐり、分担者の実践活動の事例の中から、1)「場所の芸術」として構想されたアートプロジェクトが「社会関与の芸術」へとダイナミックに変成する過程(野村)2)多様なアーティスト・コレクティブによる多様な表現活動と地域社会との共進化的関係性(戸館)について検討した。また、これに加え、3)ある音楽集団のグローバルな活動の事例に注目し、芸術と見なされなかったものが芸術となることの社会的葛藤とアート化と脱アート化の境界事例およびそこに介在する批評の機能の問題についても検討をおこなった(木村)。当該年度は、新型コロナウイルス感染症蔓延による影響で、一カ所に参集する形での研究会は持てなかったが、上記の論題を中心にオンライン研究会を実施し、その他打ち合わせとそれぞれの研究会のフォローのミーティングを行った。また、研究代表者の学会発表の他、分担者も関連論文・論説を発表している。

【2021年度】 2年目は、「アート化」の議論の理解も進み、研究会等を通じて問題意識の共有も一定程度図ることができた。特に、同論の西欧中心主義的な論理構造についての認識を深めることで日本における芸術理解と文化状況の特殊性の問題を浮かび上がらせることができた。本研究の課題のうち、社会と文化芸術の接触界面、文化芸術と市民協働に関連するものとして、主として2つの事例を検討し、以下のような知見を得た。1)山形国際ドキュメンタリー映画祭の事例(阿部):地域文化と映画人の親和性から生まれた映画祭が地域内外の関係性を通して成長していく過程は、ドキュメンタリーという特異なジャンルが大きな社会的関心と呼ぶ対象となる過程でもあった。映画祭自体がユニークな一つの芸術作品として社会化されるに至ったという構図がここに読み取れる。2)1960年代後半以降のニューヨークのオルタナティブ・スペースの展開の事例(笹島):旧来の画廊が、社会運動、アクティビズムという形を取った都市の諸アクター間の相互作用を通して「オルタナティブ・スペース」として生成発展していく、そのダイナミックな社会的過程について理解を深めた。事例の検討を通して、社会問題と芸術の関係、芸術の政治化と芸術の制度化の問題について大きな示唆が得られた。上記を含む研究会報告のほか、年度内に多くの分担者が関連の論説を発表している。また、研究活動を通じて、メンバーの間で、関連主題をめぐり市民向けイベントを開催するなど地域間交流(山形市と松山市)も生まれた。本研究が狭義の研究活動を超えた市民協働の実践に結びついていることも実績の一つと考えている。

【2022年度】 3年目も、感染症の状況を見ながら主として研究組織各メンバーの個別の研究を進めオンライン研究会を通じて知見の共有を図った。その一方で、「国際芸術祭あいち2022」の視察と共に名古屋で初めて全員で対面の研究会を持ち、皆で文化芸術の今日の状況を確認すると共に本研究の前半の総括を行った。小松田は、「アート化」論の検討を踏まえて全国各地地域の諸活動および戦後日本美術の展開に焦点を当てて研究を進めた。学会等でこれに関する研究報告を行い単著を公刊した(『社会化するアート/アート化する社会 社会と文化芸術の共進化』水曜社(2022))。阿部は、理論的研究として文化政策関連の文献調査を進めると共に、文化芸術をめぐる政治的社会的問題の検討を踏まえ、国際文化交流の場で映画祭と「アート化」の問題をめぐり講演を行った。また、山形国際ドキュメンタリー映画祭の成立過程について関係者の聞き取り調査に着手した。野村は、各地の芸術イベント・展覧会の視察を通して日本美術の「アート化」の実相について探求した。また、自らのアーティストとしての表現活動について振り返り、即興とその映像化(ドキュメンテーション)の関係性について論考を発

表した。木村は、多様な意味を包含する「アート化」の根本的問題を探るため、日本国内の「障害者アート」関連の福祉施設を複数訪れ、それぞれ「アート」という概念がどのように捉えられ用いられているかを調査した。笹島は、社会関与芸術の研究と並行して都市文化における社会的ネットワークに注目してニューヨークにおける都市のオルタナティブ・スペースに関する探求を続けこれに関する論文を発表している。戸舘は、愛媛県松山市においてアートによるまちづくりの事業に継続的に携わり、市民のクリエイティビティを活かし「公共性」を相対化する試みを続けた。また、この間のこうした活動を総括する作業を行うと共に東京において公共ホール運営計画や文化振興等の事業に関与しながら市民と公共性についての考察を深めた。

【2023年度】 最終年度は、本研究の主要課題のうち、「アート化」論の理論的検討については代表者を中心に継続しながら、社会とアートの共進化的関係の実態分析、文化芸術に関連する市民協働・交流活動の記述と分析の課題について分担者各人で探求を進め、これまでの研究を踏まえ、「アート化」論の実践的総括（文化芸術活動への参加と研究者・一般市民との研究交流）に特に力を注いだ。小松田、木村はそれぞれアート化論の内外の研究を参照しつつ、本研究の基礎視点を元に宮沢賢治の思想と実践についての検討を行った。木村はさらに、TVドラマ/映画におけるアート化の論理について分析を試みている（ ）。阿部は、山形国際ドキュメンタリー映画祭の成立過程に関する聞き取り調査を継続すると共に、映画祭の社会的意義についての講演活動も行った（ ）。野村は、主として の視角から自らの表現活動「場所の芸術」の個別事例とその社会的インパクトについて考察しその総括を行った。笹島は、社会関与芸術、都市文化研究を踏まえ「都市と文化の社会学」としてその成果を纏めている（ ）。戸舘（研究協力者）は、長年に渡る愛媛県松山市・東京港区その他における芸術文化支援の活動の知見を研究会等の場で報告している（ ）。最終年度の試みとして、本研究の知見を広く一般社会に開示し研究交流を図る目的で、メンバーで地域を拠点にしたグローバルな文化芸術活動として知られる利賀の演劇祭（富山県南砺市）および山形国際ドキュメンタリー映画祭（山形市）を視察すると共に、前者において異分野専門家間の合同研究セミナーに参加して当該主題について議論を深め、後者においては公開研究会（公開シンポジウム「アートはいつ アート になるのか」）を開催し当初の目的を果たした（ ）。なお、本研究活動の最終的な総括としてメンバー全員による共著を準備している（2025年水曜社より出版予定）。

われわれは、4年に渡る共同研究を経て、研究の核である「文化」「芸術」が今なおいかに西欧近代の磁力を強く帯びているかを改めて深く認識することとなった。そこには文化芸術をめぐる市民社会の問題性が深く根を下ろしており、文化芸術へのアクセス、非専門家＝市民の参加や協働、文化芸術の社会実装そして公衆・公共性の問題等々、多くの課題が現在も残されている。「文化芸術と市民社会」あるいは「市民社会における文化芸術」がいかにあるべきかという問いは、まさに今日的な問題性としてわれわれの目の前にある。20世紀後半以降欧米で焦点化している「文化の民主化」と「文化デモクラシー」のディレンマは、日本社会でも早晚重大な関心事となるだろう。ここにある「文化芸術シティズンシップ」の問題を見据えながら、本研究を踏まえてその課題と可能性について今後も考えていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計19件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 13件）

1. 著者名 小松田儀貞	4. 巻 3
2. 論文標題 宮沢賢治の 芸術 賢治という薬あるいは毒	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 賢治学 + (プラス)	6. 最初と最後の頁 147-157
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野村幸弘	4. 巻 72(2)
2. 論文標題 場所の芸術 (5) フラッグアート展	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 岐阜大学教育学部研究報告 - 人文科学	6. 最初と最後の頁 61-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 野村幸弘	4. 巻 72(1)
2. 論文標題 場所の芸術 (4) 岐阜大学芸術フォーラム	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 岐阜大学教育学部研究報告 - 人文科学	6. 最初と最後の頁 95-104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 野村幸弘	4. 巻 71(2)
2. 論文標題 場所の芸術 (3) 音楽家との映像制作	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 岐阜大学教育学部研究報告 - 人文科学	6. 最初と最後の頁 83-94
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Sasajima Hideaki	4. 巻 93
2. 論文標題 Organizational account of symbolic boundaries in urban cultures: social network analysis of New York art world from 1940 to 1969	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Poetics	6. 最初と最後の頁 101688
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.poetic.2022.101688	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阿部宏慈	4. 巻 5
2. 論文標題 戦地への距離 『東部戦線』 『三人の女たち』	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 SPUTNIK --YIDFF Reader 2023	6. 最初と最後の頁 3-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阿部宏慈	4. 巻 57
2. 論文標題 アーティフィケーションへの抵抗~アーティフィケーションの理論と実践をめぐって~	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 山形県立米沢女子短期大学紀要	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 阿部宏慈	4. 巻 4
2. 論文標題 占領の記憶、消された町の記憶 『最初の54年間』 『リトル・パレスティナ』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Sputnik YIDFF Reader 2021 [スプートニク 山形国際ドキュメンタリー映画祭公式ガイド 2021]	6. 最初と最後の頁 3-4
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 野村幸弘	4. 巻 70(1)
2. 論文標題 場所の芸術(2) 第14回~第31回幻聴音楽会	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 岐阜大学教育学部研究報告 - 人文科学	6. 最初と最後の頁 89-99
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 木村直弘	4. 巻 3
2. 論文標題 テクノポ-としてのゴーシュ 愚者が智者になる 革命 をめぐって	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 賢治学+(プラス)	6. 最初と最後の頁 173-211
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村直弘	4. 巻 113
2. 論文標題 TVドラマのartification 『あまちゃん』第152回を例に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 アルテス リベラレス: 岩手大学人文社会科学部紀要	6. 最初と最後の頁 19-57
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 木村直弘	4. 巻 114
2. 論文標題 TVアニメの映画化におけるartification 劇場用アニメ映画『帰ってきたドラえもん』におけるヴェクトルの作法をめぐって	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 アルテス リベラレス: 岩手大学人文社会科学部紀要	6. 最初と最後の頁 19-49
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 木村直弘	4. 巻 4
2. 論文標題 時報チャイムの音風景 《花巻市民の歌》と《盛岡市民歌》をめぐって	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 賢治学+ (プラス)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村直弘	4. 巻 109
2. 論文標題 いつ 芸術家 なのか :日本におけるArtificationをめぐる予備的考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 アルテスリベラレス :岩手大学人文社会科学部紀要	6. 最初と最後の頁 35-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 笹島秀晃	4. 巻 73
2. 論文標題 ニューヨークにおける1960年代後半以降のオルタナティブ・スペースの展開	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 人文研究 大阪市立大学大学院文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 113-130
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 戸館正史	4. 巻 1
2. 論文標題 別にアートでなくていいじゃない	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 KOSUGE1-16 Nadegata Instant Party に関する比較論考 (調査報告 ふたつの島、旅するリサーチラボ トリー)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 戸館正史	4. 巻 3517
2. 論文標題 書評 『ニッポンの芸術のゆくえ』（津田大介・平田オリザ著、青幻舎）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 図書新聞	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野村幸弘	4. 巻 69
2. 論文標題 場所の芸術（1） 初期のダンス公演と幻聴音楽会	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 岐阜大学教育学部研究報告 人文科学	6. 最初と最後の頁 85-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 木村直弘	4. 巻 42
2. 論文標題 【書評】ヴァイマル期の芸術・教育・思想に 星座 を見出す 眞壁宏幹著 『ヴァイマル文化の芸術と教育 パウハウス・シンボル生成・陶冶』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 モルフォロギア	6. 最初と最後の頁 129-132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 4件／うち国際学会 1件）

1. 発表者名 小松田儀貞
2. 発表標題 社会と文化芸術の共進化 自著紹介を中心に
3. 学会等名 東北社会学会（第2回研究例会）（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小松田儀貞
2. 発表標題 アートはいつ アート になるのか～映像と アート化 をめぐって～ 基調報告
3. 学会等名 山形国際ドキュメンタリー映画祭2023 [トークセッションナイト@Y1DFF2023]
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 阿部宏慈
2. 発表標題 さあ、お祭りだ！山形国際ドキュメンタリー映画祭の日々
3. 学会等名 東北学院大学教養教育センター（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小松田儀貞
2. 発表標題 社会とアートの共進化 artification（芸術化）をめぐって
3. 学会等名 第68回東北社会学会大会（オンライン開催）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小松田儀貞
2. 発表標題 千葉成夫「日本現代美術史」論をめぐって 共進化とartificationの視点からの検討
3. 学会等名 artification科研費研究会(オンライン開催)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 阿部宏慈
2. 発表標題 文化による都市的課題の解決
3. 学会等名 第16回アジア文化フォーラム（主催 光州文化財団）（オンライン開催）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小松田儀貞
2. 発表標題 「社会と文化芸術の共進化 『社会化するアート/アート化する社会』」
3. 学会等名 2022年度第2回東北社会学会研究例会（オンライン開催）（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小松田儀貞
2. 発表標題 artification（芸術化）についての一考察 社会とアートの共進化的動態
3. 学会等名 第93回日本社会学会大会 2020年10月31日（オンライン開催）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 笹島秀晃	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 264
3. 書名 都市とモビリティーズ 3（金子勇、吉原直樹編著 分担執筆「都市と文化の社会学--企業家主義的都市論から文化生産論へ」pp197-249）	

1. 著者名 小松田 儀貞	4. 発行年 2022年
2. 出版社 水曜社	5. 総ページ数 312
3. 書名 社会化するアート / アート化する社会 社会と文化芸術の共進化	

〔産業財産権〕

〔その他〕

社会とアートの共進化的動態とartificationの諸相に関する領域横断的研究 https://www.facebook.com/artification2020

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	阿部 宏慈 (Abe Koji) (10167934)	山形県立米沢女子短期大学・その他部局等・学長 (41501)	
研究分担者	野村 幸弘 (Nomura Yokihiro) (20198633)	岐阜大学・教育学部・教授 (13701)	
研究分担者	笹島 秀晃 (Sasajima Hideaki) (30614656)	大阪公立大学・大学院文学研究科・准教授 (24405)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	木村 直弘 (Kimura Naohiro) (40221923)	岩手大学・人文社会科学部・教授 (11201)	
研究分担者	戸舘 正史 (Todate Masafumi) (50869055)	愛媛大学・社会共創学部・寄附講座助教 (16301)	2023年度は研究協力者

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関